

## 主の晩餐

コリント人への手紙第一 11章 17-34節

### はじめに

今年から、毎月第二主日の説教は、新約聖書からの説教となります。私が担当する時は、引き続き「コリント人への手紙第一」からお話します。

コリント人への手紙第一は、11-14章まで「礼拝の混乱に対する教え」が書かれています。今回は、礼拝の時のかぶり物の問題についてお話ししました。女性は礼拝の時に、ヴェールのようなかぶり物を着けるべきかどうかという問題でした。

今日の聖書箇所は、二つ目の問題について書かれています。それは聖餐式の問題です。コリント教会の中に、聖餐式をふさわしい仕方を守っていない者がいる、そのことによって神様のさばきを招き、教会の集まりにも分裂が起こっていたのです。

今日の聖書箇所には特に主の晩餐、つまり聖餐式について書かれていますが、そのことを通して、教会とは何かということについてお話ししたいと思います。

### 1. 教会とは何か？

今日の聖書箇所には、「集まり」という言葉がよく出てきます（17、18、20、33、34節）。教会とは、イエス様を信じる者たちの集まりを意味します。教会は建物のことではありません。キリスト教会が教会堂を持つようになったのは、三世紀頃からだと言われています。それまでクリスチャンたちは、ユダヤ教の神殿や公共の集会場やクリスチャンの家で集まって礼拝を守っていたのです。建物がなくても教会は存在します。教会は、クリスチャンの集まりだからです。クリスチャンが集まって礼拝する、そこに教会が存在するのです。

イエス様は言われました。「**二人か三人がわたしの名において集まっているところには、わたしもその中にいるのです**」(マタイ 18:20)。クリスチャンが集まって礼拝するところには、イエス様が共におられます。イエス様の臨在のもとに集まって礼拝をする、そこに教会が存在するのです。

しかし教会は、決して自主的な集まりではありません。教会とはギリシア語で「エクレシア」と言います。これは、「呼び集められた集会」を意味します。教会は、自分たちの意志で集まった集まりではなく、神様によって集められた集まりです。神様が永遠の昔から私たちを恵みによって選び、イエス様に対する信仰を与えて福音に応答させてくださったことによって、集められた集まりです。

教会は、イエス様を信じる者たちの集まりですが、自主的な集まりではありません。気

の合う人たちの集まりでも、同じ境遇の人たちの集まりでもありません。いわゆるサークルのようなものではありません。神様によって集められた集まりです。ですから、必ずしも気の合う人たちばかりではありません。同じ境遇の人たちでもありません。赤ちゃんからお年寄りまで、日本人から韓国人まで、病気の人から健康な人まで、専業主婦から会社員までいます。そのような神様によって集められた全く違う境遇の人たちが、イエス様の臨在のもとに一つとなって礼拝をする、それが教会なのです。

## **2. どうしたら一つとなれるか？**

では、神様によって集められた全く違う境遇の人たちが、どうしたら一つになることができるのでしょうか？それは、聖餐式によってです。イエス様は、私たちが一つとなるために、聖餐式を与えてくださったのです。

聖餐式では、パンと杯が用いられます。パンはイエス様の裂かれたからだを表し、杯はイエス様の流された血を表します。

私たちは、イエス様の裂かれたからだを表すパンを食べ、それを与るごとに、キリストのからだの一部であることを覚えるのです。24節にあるように、イエス様はパンを取り、感謝の祈りをささげた後それを裂いたとあります。イエス様は一つのパンを裂いて、それを弟子たちに与えたのです。私たちも、一つのイエス様のからだを分け与えられ、それに与かり、キリストのからだの一部とされているのです。

また私たちは、イエス様の流された血を表す杯を飲み、それに与るごとに、キリストにある兄弟姉妹であることを覚えるのです。兄弟や姉妹は血の繋がりがあるものです。イエス様を信じる私たちは、イエス様の血によって繋がっているのです。イエス様の血によって兄弟姉妹、家族とされているのです。

私たちは、神様によって集められた全く違う境遇の者たちの集まりですが、聖餐式に与ることによって、互いにキリストのからだの一部であり、キリストにある兄弟姉妹、家族であることを覚えるのです。

聖餐式は、私たちを一つにします。一つのイエス様のからだを分け合い、同じイエス様の血を分け合うことによって、私たちはキリストのからだとして建て上げられ、神の家族として建て上げられていくのです。

## **3. 聖餐式のふさわしい守り方**

では私たちは、聖餐式にどのような姿勢で臨めばよいのでしょうか。今日の聖書箇所には、聖餐式にふさわしい仕方ですべて守っていない者は神様のさばきを招くということが書かれています。コリント教会には、その結果、「**弱い者や病人が多く、死んだ者たちもかなりいる**」と書かれています。

聖餐式に臨むふさわしい仕方というのは、伝統的に「信仰告白」と考えられてきました。つまり聖餐式は、イエス様に対する信仰を持った者だけが与れる、イエス様に対する信仰

を持っていない者は聖餐式に与ってはいけない、信仰を持っていないままで聖餐式に与れば罪を犯すことになり、神様の裁きを招くことになるというものです。

しかし今日の聖書箇所文脈で見ると、もう少し違った見方があるのではないかと思います。コリント教会では、聖餐式と愛餐会が一つとなっていました。コリント教会のクリスチャンたちは、持ち寄りの愛餐会を行ない、その後に聖餐式を守っていたようです。持ち寄りの愛餐会は「アガペー」と呼ばれ、貧しいクリスチャンも一緒に皆で食事をしたのです。

しかしコリント教会の愛餐会では、貧しいクリスチャンが軽んじられていたようです。貧しいクリスチャンの多くは奴隷であって、夜遅くまで働いていました。しかし彼らが愛餐会に来る頃には、食事がなくなっていたようです。比較的裕福なクリスチャンたちが我先にと食事をして、飲め食えやで良い気持ちになって、貧しいクリスチャンたちの食事が残っていなかったのです。

そのような中で聖餐式が行われたのです。裕福なクリスチャンたちはお腹いっぱい酒に酔っている、貧しいクリスチャンたちはお腹が空いてペコペコな状態、そのような中で、キリストのからだを分け合う聖餐式が行われていたのです。聖餐式は、互いにキリストのからだの一部であり、キリストにある兄弟姉妹、家族であることを覚えるものです。しかしコリント教会では、貧しいクリスチャンへの配慮や愛が欠けていたのです。

パウロは、「**だれでも、自分自身を吟味して、そのうえでパンを食べ、杯を飲みなさい**」と言います。パウロがここで言っている自分自身への吟味は、愛の吟味ではないかと思えます。自分自身の愛を再点検すべきだということではないかと思えます。そしてふさわしい仕方聖餐式に与るとは、兄弟姉妹への愛をもって聖餐式に与るということではないかと思えます。もちろんここでの愛は、兄弟姉妹への愛だけに限定されるものではなく、神様への愛、イエス様への愛も含まれるものです。私たちは、聖餐式ごとに自分の愛を吟味し、神様への愛、隣人への愛を再点検しなければなりません。

31節には、「**もし私たちが自分をわきまえるなら、さばかれることはありません**」とあります。私たちは自分の愛を吟味し再検討して、自分の愛の貧しさを覚えながら聖餐式に与るのです。そしてそこでイエス様の愛に触れ、イエス様の流された血によって愛の貧しさが赦されていることを覚えるのです。そしてもう一度、愛に生きる決心をするのです。それこそ聖餐式のふさわしい臨み方ではないでしょうか。

## **おわりに**

32節に「**私たちがさばかれるとすれば、それは、この世とともにさばきを下されることがないように、主によって懲らしめられる、ということなのです**」とあります。パウロはふさわしくない仕方聖餐式に与る者は、神様のさばきを招くと言います。しかしその神様のさばきというのは、

この世とともに受けるようなさばきではないと言っています。つまり永遠の滅びに至るようなさばきではないと言っています。それは、主の懲らしめだと言うのです。懲らしめとは、「教育する」「訓練する」という意味の言葉です。イエス様は言われました。「**わたしは愛する者をみな、叱ったり懲らしめたりする**」(黙示録 3:19)。

聖餐式にふさわしくない仕方と与る者への神様のさばきは、決して永遠の滅びに至るような恐ろしいものではありません。それは、イエス様の愛から出ているものです。イエス様が私たちに訓練するため、成長させるための試練です。

教会は、神様によって集められた全く違う境遇の人たちが、イエス様の臨在のもとに一つとなって礼拝をする所です。しかし私たちは、自然と一つになっていくのではありません。私たちはイエス様が定められた聖餐式に与ることによって一つになっていくのです。聖餐式のたびに神様への愛、隣人への愛を吟味し、再点検して、愛の貧しさを思い知らされて、それでもイエス様に愛され赦されていることを覚えることで一つにされていくのです。またイエス様の愛の懲らしめ、愛に基づいた試練を経験することで一つにされていくのです。